

文芸復興とは

園長 児嶋 草次郎

11月23日(土)の収穫感謝祭も無事に終え、12月に入り、静かに冬を迎えています。今年のこの茶臼原の初霜はこの11月23日でした。早朝、下のハウスの野菜の手入れに行くと、雑草の葉っぱの表面が白くなっているのを見ると、砂糖でも振りかけたように凍っていました。本格的な霜のシーズンに入っていないので、園庭の花々はまだ生き残っています。収穫感謝祭当日も、1000名ほど参集して下さった方々には、フヨウを始め咲き乱れた花々に感動していただけたことでしょう。

私たちは実に多くの方々に御支援いただいております、その御厚情に対する感謝を表明する一日として、収穫感謝祭を位置づけています。具体的には石井記念友愛社で作ったお米や野菜等を使って、ささやかではありますが、料理を作って、招待した方々をおもてなしするのです。もちろん無料です。今年は夏以降の不順な天候で人参やホーレン草は蒔き直しし、唐イモはツルボケでしたが、他は順調に育ちました。この1年間の皆様からの様々な御支援、ありがとうございました。

さて、今年は、収穫感謝祭で発表した石井記念のゆり幼稚園の子供たちの太鼓演奏を鑑賞しながら、魂を揺り動かされ、次々に心の底から湧き上がって来た思いを書かせていただきます。

来年が戦後80年です。太平洋戦争に敗けてから80年という年月がたってしまったという思いももちろんありますが、日本の1000年以上の長い歴史から言うと、80年なんてほんの一瞬なのだという気にもなります。

今年の高鍋の「友愛の森」事業をやるにおいて、高鍋「明倫文化」の復興をもコンセプトとして掲げました。言わばルネッサンスです。大袈裟で笑った方もおられると思いますが私は真剣です。「せいごろう亭」で機織りをやり始めたり、「明倫の小道」を作ったりすることも、復興の一部かもしれません。しかしもっと大事なことは、精神文化の復興だと思っています。

長い歴史と文化の重なり合いの中で徐々に形つくられていった日本人としての精神文化、例えば、お祭りを見ても原点は、天や神への感謝と祈りだったはずなのに、戦後の政策と教育の中で、一つの単なる行事・イベントとして位置づけられるようになっていきます。昔は神事やお祭りは、子供たちにとっても、重要な教育の場でした。それらを体験することで日本人として地域で育つことの誇りやアイデンティティを獲得していったのです。

戦後、敗戦国の宿命として戦前の価値観が否定され、神話や歴史物語にはあまり関心が向けられなくなり、子供たちの関心は、その後テレビやゲームやインターネット等の仮想現象の世界に向けられるようになりました。またグローバル化の流れの中で、興味はより外に向き、自分たちの育つ地域の歴史や文化への関りも薄れていっているようにも感じます。皮肉なことですが、外国人の方が日本人の伝統的精神文化に関心を持ち、多くの人々が日本観光を訪れるようになっていきます。

そういう時代状況の中で、精神文化の復興とは何なのか。私なりにイメージしたものを、この西都市高鍋町木城町に位置する4つの友愛社の保育園の行事・イベントのあり方としてまとめてみました。

私は研究者でも歴史家でもありませんので、見えない細かい部分については、歴史の大きな流れから

印象としてとらえ、イメージーションを最大限に働かせ、過去を否定せず受入れ、子供たちの未来への挑戦への力となるように描いてみました。先人たちも、案外このようにして精神文化を具現化していったのではないかとも思います。

4つの保育園への、私からの来年度へ向けての宿題ともなります。これらの演出・創作について、御指導できる方がおられましたら、このプロジェクトに加わっていただきたいと思います。

来年も、皆様方からの御支援・御指導よろしくお願い致します。この1年間、ありがとうございました。

## 石井記念のゆり幼児園の太鼓演奏の意味を高める

### のゆり幼児園設置場所の歴史的背景

今から450年近く前、この茶臼原から木城にかけての大地で、『九州の関ヶ原の戦い』と言われる壮絶な戦争が2回行われ、多くの若者たちの命が失われました。

一回目は、1578年、大分の太田軍と鹿児島（薩摩）の島津軍との戦いで、主に木城平野を流れる小丸川（当時は高城川）をはさんで戦闘は行われ（高城川合戦）、結果的には島津軍が勝ちましたが、合わせて約7000人が亡くなったと言われています。勝利した島津軍は、300人ほどの僧侶を集めて、亡くなった両軍の戦士たちを供養し、その供養塔は今も残っています（宗麟原供養塔）。

二回目は、1587年、九州統一をめざす薩摩島津と全国統一をめざす豊臣秀吉との戦いです。のゆり幼児園からすぐ近くの根白坂に陣取った豊臣軍に島津軍が果敢に夜襲しましたが、豊臣軍の強靱な鉄砲隊の壁を突破できず、敗退することになります（根白坂合戦）。のゆり幼児園のあたりにも、豊臣軍の陣地があったと思われる。300人余りが銃弾に倒れたと言われていますが、1000人単位の若者の命が失われたと思われる。この時の戦死者の供養の記録はありません。

それから約300年後、石井十次が理想郷づくりのためにこの地の開拓に入りました。多くの若者たちの夢や想いの埋まったこの大地の上に理想郷を作ることが、その先人たちを弔い、慰霊することにもなると思ったことでしょう。

### 太鼓の意味

太鼓は古代より神具として祭礼等に使用されました。天の神に豊作を祈ったり、収穫の感謝を伝える神具でもありました。また戦争の時など、戦士の士気を高めたり、亡くなった戦士を弔ったりする儀式にも使われました。

おそらく450年前も、互いの陣地で、太鼓で鼓舞し合ったり亡くなった戦士を慰霊し合ったりしたと思われる。

それから長い年月が過ぎ去っていますが、魂は不滅。亡くなった先人たちの魂を慰霊・供養するための太鼓として位置付けることで、その価値は間違いに増し神聖なものとなります。その思いが天に届くことで、子供たちも守られ、平和への願いに呼応してもらえるでしょう。子供たちも親たちも、その長い歴史の流れの中に自分たちを位置付けることができます。そして、その歴史の重みを体で感じ取り、神聖な使命を自覚し、この地で育つことに誇りを感じるようになるでしょう。自分の生まれ育つ地の歴史と文化を体で吸収することで、アイデンティティーは獲得されていきます。

- ・服装も、薩摩と豊臣と二つに分けるとよい。
- ・演奏者の視線も大事。天の神や先人たちの魂に向けられたものであること。視線は天へ。

## 石井記念ひかり保育園の精神的存在意義

### その歴史的・神話的背景

宮崎県は、『神話のふるさと』と言われるそうですが、西都原一帯は、その物語の中心的な活躍の舞台でした。古墳時代、一ツ瀬川流域から小丸川流域の台地を見ても、古墳が、西都原を中心（約300基）に、茶臼原、新田原、川南、持田（高鍋）地域に700基以上点在しており、この地域に一つの豊かな国が、何百年か存在していたことが分かります。

西都原では、高天原のアマテラスオオミカミ（天照大御神）が、地上に平和をもたらすために統率者として孫のニニギノミコトと家来たちを降臨させ、そこでコノハナサクヤヒメと出会う話が有名です。この茶臼原にもその部族の一団が定住し、ムラを作っていたと思われます（古墳50基）。アマテラス一族はその後、県南一体にも勢力を拡大していき、県西地域の高原町で、ニニギノミコトの曾孫のサノノミコトが生まれます。後の神武天皇です。

サノノミコトは、鹿児島の人族とも関係を深め、水軍（海軍）を増強し、理想的な国家建設を夢見、志し、やがて美々津の港から大和の地へ向けて旅立ちます。

そして、様々な苦難を乗り越えながら、ついには大和の地、奈良県橿原（かしはら）に達し、そこに都を作り、初代天皇神武天皇として即位します。

### 歴史・神話を体現する意味

このような壮大な物語に幼少期に体で触れることで、子供たちは日本人としての魂を覚醒させ、またこの地で生まれ育つことに誇りを抱くことでしょう。昔はお年寄りが伝承の役目を果たしていましたが、核家族社会になり、歴史や神話は伝えにくい社会となってきています。歴史的感性を意図的に養える環境を作る必要があります。

石井十次もこの地の歴史・神話について知らないはずがなく、茶臼原の大自然だけではなく、この古墳の歴史や神話との触れ合いによる感性磨きも期待したはずです。この大地は、大自然も歴史も神話も豊かであり、子供たちを教育するにおいて、最も適当な所なのです。

- ・運動会、収穫感謝祭の出し物（遊戯）として、神話・物語を創作ダンス風に表現すること。
- ・服装も当時をイメージできるものとする（毎年活用する）。
- ・神楽等も参考とすること。単なる「発表」ではなく、「祭礼」的な雰囲気（天への感謝と祈り）を持たせること。
- ・ひかり保育園の「ひかり」は、アマテラスの「ひかり」でもあり、神社の巫女の舞いも参考とすること。

## 石井記念明倫保育園の立地の歴史と埋まっている思い

### その歴史的背景

平安時代、大分県の宇佐八幡宮（創建725年 奈良時代）から、一人の神官が、荘園の管理と新田の開発のために延岡（縣 あがた）に派遣されました。土持一族物語の始まりです。一族は地道な努力で繁栄していき、地方武士を束ねた豪族として宮崎各地を支配するようになり、土持七頭と呼ばれるようにもなります。1200年代、財部（高鍋）地域を支配していたその一派は、財部土持として独立し、小丸川と宮田川にはさま

れた、それまで人の住めない荒れた沼地や川原を開拓し、水田を整備し、城を築き、町づくり・国作りを始めます。そして元神官として戦を好まず、天下太平と民衆の平安とを求めて230年間ほどこの地を治めました。地方の成り上がり武者軍団乱立の時代、民衆を大事にする政策を取らなかったら、これだけ長く支配は困難だったでしょう。現在の高鍋の町の基盤を作ったのは、この土持一族でした。

しかし、弱肉強食の戦乱の戦国時代になり、1457年、様々な努力もむなしく、西都（都於郡）の伊東一族に滅ぼされてしまいます。築き上げた歴史と文化は、その痕跡も残さないほど破壊されてしまいました。記録もほとんど残されていません。

お城から1キロほど西都寄りに、菩提寺であった太平寺跡があり、いくつかの墓石が残されていますが、約230年の歴史から言うと墓石の数はあまりに少なすぎ、当時お寺も焼かれ墓石と一緒に今の地に捨てられた可能性もあります。

### 鎮魂と平和への願いを具現化する

現在、明倫保育園の立っている土地は、江戸時代、お城から東に伸びる大手門通りに面する重要な場所になります。家老屋敷通りと上級商店街とにはさまれた場所でもあり、いわば明倫文化発祥のゾーンでもあります。しかし、江戸時代この地はずっと空き地として放置されてきているようでもあります。これは謎です。ここに菩提寺「太平寺」があったのではないか。だとするならば、慰霊と供養が必要です。

550年以上の年月が経っていますが、魂は不滅であり、亡くなった先人たちの魂を慰霊・供養しながら、この地で保育事業をやれることに感謝し、また、子供たちの未来に力と平和を与えてくださるように祈らねばならないでしょう。

- ・運動会、収穫感謝祭の出し物（遊戯）として、平安時代から戦国時代への土持一族の物語を創作ダンス風に表現すること。
- ・服装も平安時代から鎌倉、室町へとイメージできるものとする（毎年活用する）。
- ・当時の土持一族・武者たちの思いを想像することが、供養にもなる。その創造的な開拓の歴史と悲劇的な壊滅の歴史とを表現することで、平和への願いを具現化する。

## 石井記念やまばと保育園の歴史的背景と使命

### 秋月種茂と明倫堂教育

根白坂の合戦（1587年）で薩摩島津軍に大勝した豊臣秀吉は、その後すぐ九州・日本を平定します。福岡地方での豊臣との戦いに敗れた秋月家（36万石）は、豊臣秀吉より薩摩の引き揚げた財部（高鍋）への移封（国替え）を命じられ、失意の中で家来たちと一緒に移住しました。石高もわずか3万石に減らされます。土持財部の後、伊東、薩摩と支配者は変わっており、また戦乱の後で大地は荒れ果て、新たな国作りが始まります。石井十次のご先祖も、この時秋月の殿様に付いてきた下級武士たちの一人でした。

高鍋藩秋月家七代藩主秋月種茂を江戸より迎えて（1761年 17歳）から、一つの理想国作りが始まります。種茂の考える理想国とは、家を留守にするときカギをかけなくてもよい社会、道でモノを拾ってもそれをポケットに入れる人がいない社会で、そのような社会を実現するために教育が一番大事であると考えました。藩校明倫堂ができたのが1778年です。明倫堂は94年続き、石井十次は一番末期、1871年（明治4年）に入学しています。種茂は、世界で最初と言われる児童扶養手当を支給したり、間引きを禁止したり様々な善政を行っています。これらを見習ったのが、8歳下の弟で米沢藩に養子に行った上杉鷹山です。アメリカの大

統領ケネディが日本で最も尊敬する人物と評しています。

種茂が武士たちの生活心得として発表した「高鍋藩士規」も注目に値し、その中に次のような文があります。『病氣、災難があった時は、身分を問わず、互いに相救うべき事』、『子供の教育おろそかにすべからず』。石井十次が学んだ藩校明倫堂には「明倫堂学規」があり、「幼者を待つに慈を以ってし、長者に事うるに悌を以ってす」等の文も見られます。十次の人格の基盤は、これらの精神文化によって作られました。石井十次は種茂が生まれて122年後、1865年（慶応元年）に生まれましたが、種茂の考える理想郷を違った形で実現しようとしたのです。

その教育理念を現代に生かす

石井記念やまばと保育園は、元高鍋町立小学校分校を改修して始まっています。多くの子ども達が学び夢を語り合った校舎でした。明治維新後、明倫堂の教育理念がその後の学校に継承されることは残念ながらありませんでしたが、石井十次の教育理念の中に生き続けていると言ってもよいでしょう。福祉的感性が秋月時代から始まったものなのか、土持の時代から精神文化として生き残っていたのかは分かりませんが、先人たちが大事にしてきた精神文化として具現化しながら次の世代に伝えていかねばならないでしょう。

精神文化は、時代時代の状況にもまれながら、ある時にはDNAの中から掘り起こされながら時代を越えて伝承されていくものでしょう。神話もその一つでしょうし、文字だけではなく、歌や踊りや演劇も含めて、その伝承に成功した時、その民族はアイデンティティーを獲得し、生き残っていくものでしょう。

- ・運動会、収穫感謝祭の出し物（遊戯）として、秋月高鍋藩の教育を創作ダンス風に表現すること。
- ・服装も江戸時代の当時をイメージできるものとする（毎年活用する）。
- ・石井十次少年を登場させることで、現代に時がつながっていることを自覚できる。
- ・少年たちの人格を形成していくにおいて、文字教育ではなく、先人たちの生きざまを体験的に繰り返し学ぶことで、感性・資質として取り入れていくのでしょ